

A. 高校普通科の教育課程改革の問題

いという基準だけでよいのか。④ 第一次産業から第二次産業をへて第三次産業へと産業構造の重心が移り、高校出身のボーイやウエイトレスまで出てきている現在、そこで必要とされる技術学とはどのようなものであるか——など。

⑤ 「芸術」や「文学」の再検討

以上の教材の増加や教科の新設を実現しようとなると、少くとも2～3時間と相当の予算の裏づけを必要とし、そのため、芸術教科や国語科の文学教材を減少させてはどうかという意見が出された。(例えば、ソビエトでは高校段階において国語：物理の時間数が、日本の約3：1に対して2：1(文科系)1：1(化学系)2：3(物理系)である。)「現代において高校を、文学・音楽を知らずに出ていくのと、エレクトロニクス・技術学を知らずに出ていくのと、どちらが困るか」という問題にもなる。それは、「生きる」「人間をつくる」とはどのようなことなのか、という問題にまでつながる。これに対しては、長時間、多面的な論議がなされたが、意見は基本的な対立をふくんで、来年にもちこされることになった。

⑥ 全教育体系の中での位置づけ

⑥の問題は、高校段階だけでは解決できないのではなかろうか。⑤で芸術や文学教材をへらすことを主張した者も、芸術的・文学的な感動や情操を無視したのではない。知的・論理的思考は直観と切り離せないものであり、情操を養うこと、芸術的直観の訓練の中で思考や論理も鍛えられる一面もある、という数学担当

教師の意見もあった。問題は「後期中等教育」の中で他のより重要なものを(相対的に)へらしてまで、やる必要があるか、ということである。小中段階で国語、芸術に集中的に時間をかけて、高校ではうんと比重をへらすか、無くして、科学的教科をふやすべきではないか、という意見である。それに対しては、日本という社会の特殊性を考えるべきであるという反論もあった。

この問題は、高校の中での必修統一と選択多様化ともつながる。すべてを総花式にやらせるか、コース別、性別、個人別などの選択・分化をもう一度考える必要があるのではないか。教育課程にしても、内容(教科書をふくめて)にしても、一つにすべてをまとめようという意見でなく、少くとも三つ位にまとめてみることも大事なのではなかろうか。BSCSが三種の教科書を編集したように——という意見もでた。

以上の他、

⑥ 全教育体系—学校制度全体の総年数と内容

⑦ 入試・浪人・労働

の問題がだされた。

3. むすび

これらの問題について、附属という教育実験の場で試みうるものはとりあげ、大学の教育学部の他、文・理学部、法経、工農学部の学者の協力を得て、その問題追求の巾を広げ、内容を深めていく努力を重ねていきたい、と我々は考えている。(中尾)

IV 総括

(1) 教育内容の実験的研究というテーマを掲げながら、実は各教科毎のそれぞれ日常的な試みしか問題にできなかったことについて、或は羊頭をかかげて狗肉を売るの感をもつ人があるかもしれない。それは我々自身の感じでもある。

しかし、たびたびのAグループの会合の中でたかかわされた議論の焦点となったのは、高校の教育課程は高校の段階だけで改革が可能なのだろうかということであった。改革できないことについて理論だけを提起するのは学者的発想であって、そうした空想をどれだけならべたとしても、日本の教育の前進を期待することはできないであろう。

たしかに高校の教育課程の改革案をまとめることがこのグループをつくらせた共通の関心であった。そして改革の方向について、第一部のその3で示されてい

るようにいろいろの要求が各方面から出されてきている。産業界の高校教育に対する関心はかなり強いものがあるし、科学技術の進歩に対して高校教育が立ちおくれしている点については多くの人が指摘している。

問題は高校進学率が都市部で80%に達しようとしている現在(洋裁・理美容、その他の職業教育や企業内教育、さらに青年学級などの社会教育を含めれば16～18才のほとんどに近い青年たちが何らかの形でうけている)後期中等教育段階の教育の制度と内容をどのように統一し、改革したらよいかということである。

20世紀初頭(明治33～35年にかけて)の義務教育(4年)の就学率は80%台から90%台に達したのであったが、現在の後期中等教育はほぼ20世紀初頭の小学校段階の就学率(進学率)をみせているともみることができる。念のためにいえば、現在の大学進学率は、20

世紀初頭の中学校への進学率と比べても格段の高まりをみせ、特別の大学(大学院大学?)をのぞいた大学、短大、高校の教育は、明治の中等教育より大衆化している現実がそこにあるのである。

現在の後期中等教育をただ科学技術の進歩に対応させる内容の高度化現代化の面からだけとらえ、高校段階で優れた能力を開発する可能性を追求するコース(ハイ・タレントの育成)を設定し、そのための教育課程を編制しよう(それも現在の教育課程では不可能である)というのが最初の頃のわれわれを強くとらえた夢であった。そのハイ・タレントの育成(それは当然大学の改革も含むが)がなければ科学的レベルにおいて米ソに立ちうちすることができず国家的利益(パテントの問題その他に関連してもそうである)をはかるためにも、この改革は早急に必要であろうということであった。それは大学の改革さえあれば、それに即応させることによって可能かもしれない。しかし、現実の高校教育については1~2%の者たちのための教育であり、むしろ大学教育の改革につながるものであって高校教育の改革にはならないであろう。

(2) 普通科の教育内容の検討

それでは、もっとも一般的な高校教育をどの方向にかえたらよいのであろうか。問題を高校のなかでも普通科に限ったのは、われわれ全員が全日制普通科の教育を現実に担当していることにもよるが、又今日における一般的意味での普通科の教育研究の重要性を無視できないからでもある。

即ち昭和36年以後高校の諸課程の中でいちじるしく増大して来たのは普通科の課程であった。大学進学率もたしかに上昇はして来ているが、それよりももっと注意すべきは普通科の中でも大学に進学しないで職業につく生徒の割合が現在なお60%を示していることである。職業課程修了者よりも普通課程修了者を企業はより歓迎し又期待することが多い。その傾向はとくにこの4~5年の傾向である。

しかしそのことから、高校の教科内容を完全に消化できる者がおどろくほどに少ないという困った現象を結果として生じているのである。普通科高校の教育課程の主流はほとんど進学者を対象とするコース(Bコース)で占められ、その中へ進学しない多数の生徒が吸収されてゆくとき、内容を消化できないで不適應をおこす生徒たちが出てくるのは当たり前かもしれないのである。

高校普通科の教育内容の改革について考えるとすれば、その問題点は次の3つである。

〔1〕高等学校が全員を包含する一般教育の場(高等教育ではなく明らかに中等教育としての)となるの

は一般的傾向であるが、そのなかで科学技術の進歩に対応する教育課程はどのように編成されるか。

〔2〕普通科の教育課程を各コースによって(文科コース、理科コース、就職コースというように)わけ、いわば多様化すべきであるかどうか。

〔3〕各教科の内部において、技術革新の時代に即応する内容の高度化、現代化をはかるにはどうしたらよいか。

〔1〕は、第一部の調査からみれば、高校に対して全員入学乃至義務化を希望する声と、技術革新の時代をすすめるハイ・タレントの育成を期待する意見とがほぼ等しいウェイトで提出されてきている。この二つの要求は相対立し相矛盾する面をもっているし、この上に統一した意味での後期中等教育の改革をおすすめるのは、かなりの困難が予想されるであろう。

しかし、現在高校教育が改革されねばならないのはまさにその問題に対してである。好むと好まざるにかかわらず、高校進学率が90%に達するのは時間の問題だと思われるし、美容、洋裁、企業内教育課程を高校教育のワクの中に吸収すれば、やがて100%に近い就学率を期待することができるであろう。そして一方では技術革新の波が科学技術の最先端の研究者を育成するためにも、又企業内での中堅労働力を確保するためにも、現在の遅れた高校教育の内容をかえさせないではおかないであろう。

前にも指摘したように、最先端の研究者、ハイ・タレントの育成はもちろん高校段階の改革では不可能であり、大学改革の基本問題でなければならないと思うのであるが、それ以外のいわば普通の高校(後期中等教育)を問題にする場合においても結局は学制の改革を前提にしなければならない所まで来ているのではないだろうか。

企業の側からいっても、又労働者の側からみても、そして又社会一般の趨勢からみても高校教育が社会的進歩・技術革新の波に即応し、できれば社会をリードする内容をもつように改編されねばならぬ時期に来ているのである。そして現在の短大、一般大学(ここでのいうのは大学院大学以外の教養を目的とした普通の大学であるが)の教育内容の大半は十分に後期中等教育段階で消化できるものである。学歴偏重の弊風さえ社会から除去されれば、大学進学希望者はこれほど増大するはずはないのである。

高校段階において現在の受験体制によるロスを除去し、かなりの程度専門教育をも拡充した(職業課程はもちろんのこと、普通課程においても社会的要求をとり入れた教育課程を編成してすぐに職業に就けるような内容を取り入れるという意味で)教育課程の編成は(現行でも不可能ではないかもしれないが)多分1年

A. 高校普通科の教育課程改革の問題

下へくり下げることによって可能であり、五・四・四制（義務教育年令の1年引下げによる小学校5年，中学を現小5～中2までの4年，高校をそれ以後の4年とする）或は四・四・四制，五・五・四制を打ち出すことによって解決させられるべき問題となってきたとも考えられる。

そして教育課程が全面的に改革されたとき，技術革新に対応する後期中等教育の内容をかなり思い切っとうち出すことができるであろう。4で指摘したような技術革新に対応する高度な教育内容は，小学校の教育が国語，算数，芸術を中心に，中学校において英語，数学を中心に編制されたその基礎的教育課程の上に立てはじめて全き効果を期待されると思うからである。

〔2〕は，それでは現実の問題として高校普通科の教育課程を現代的制約（633制のワクの内において）の下において改造するにはどのような方策があるだろうか。進学率80%に達しようとしている高校の巾ひろい生徒の実態に対して同一の教育内容——しかも現実には全く役に立たないような教育をおしつけることは無意味であり，改革の方向が多様化を前提にしなければならないことはある程度は当然のことであろうけれど，しかし普通科の内容がB類型を主とし，大学の予備校化している状況の中で，そのB類型の教科をこなせない（特に数理）多数の生徒をかかえている矛盾だけは何とかしなければならないであろう。文科・理科コースを分けることは，国立，私立大への途を分ける意味しかもっていない現状では，企業の側でさえこうしたコース分化は期待していないのである。むしろどちらの側にも，内容の高度化・現代化は要請されており，さらにまた直ちに社会に出る就職者に対しても，

技術革新の成果「高度化」は要求されるのである。PSSC物理の如き現代的内容は進学しない普通科生徒にとっては尙必要とされるであろう。

（それにもかかわらず普通科の中での多様化が，文科コース・理科コース以外につくり出せないのは，現在の高校の定員のワクの中で，総体的に科学技術的教科の時間数を増加させることはどこかヘシワよせをもたらさざるを得ず，教科教員定数の問題一壁—にぶつかなければならないからであろうか）

〔3〕は，したがって学制の問題に手をふれず，又教科のワクをも大巾にかえないという現状の範囲内で可能な教育内容の現代化の試案である。

(1) 社会科の内容を現代化する一つの試みとして地理学習の系統化，歴史の内容の編成とくに科学史技術史的分野をとり入れること，「倫社」の中に科学思想史・科学的思考・論理を導入すること，要するに社会科の中に科学性を導入することが現時点で最も要求されねばならない。

(2) 数学の中に数論理性を確立し，現在の数学教育内容の体系を確立すること。

(3) 理科においては，自然科学の基礎を重視し，

(4) できうれば，「科学的思考」「技術学（工学）」を特設教科として設け，その内容を実験的に試みることを，これは時間配当の問題もあるが，今後の附属のカリキュラムの中で考えてみたいことである。

なお本研究が，昭和41年度科学研究奨励金による研究であること，そしてまた，このさきやかな研究に対して教育学部の広岡亮蔵，田浦武雄，成田克矢，江藤恭二の諸先生の御助言，御指導が寄せられたことについて深く謝意を表して筆を擱きたい。（都築）